

念仏と心のあるじに、煩惱と心の客人に

先日、波帰の方が二十五回忌法要を仏参でおつとめになりました。お経が済み、お茶をいただきながらしばし歓談したのですが、その際に「生れて七十年をやがて迎えるが、こげえな暖冬は初めてじゃの」とおっしゃいました。言われるとおり、私も今月九日で六十二歳になりましたが、こんなに暖かい冬は初めてです。雪かきをすることなく春を迎えます。こんな状態ではスキー場もグレンデの整備・管理、経営など大変だったでしょうね。

暖冬の一月、二月の二カ月に七人のご門徒が往生なさいました。「さみいと人が亡くならずがの」とよく耳にしますが、人の往生には気温の寒暖は関係ないのかななどと思つ二カ月でした。

骨章」の

されば人間のほかなきことは老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけ、阿弥陀仏を心かたのみまぬらせて、念仏申すべきものなり。

とあるお示しをいただきながら、他人事と思つている自分がいます。自分中心に物事を捉え、考えている凡夫の自分に気づかせられます。煩惱から離れることのできない自分であると改めて思いをいたすことです。

暖冬とはいえ寒い時期、外に出るのがついつい億劫になつてしまい、こたつに入り本を手読書をする時間が多かつたこの二カ月でした。その中の一冊、梯實圓和上の「親鸞聖人の信心と念仏」の中の次の一文が目にとまりました。煩惱をば心のまらんとし、

まらうど

念仏をば心のあるじとすれば、あながちに往生をばさえぬ也。煩惱を心のあるじとし、念仏を心のまらんとする事は、雑毒虚仮の善にて往生にはさらはるゝ也。

この法語は『和語灯録』二にある法然聖人のお示しです。煩惱から離れることのできない凡夫の存在である限り、私たちは臨終まで煩惱が燃えさかっています。しかし煩惱を心の客人とし、本願の念仏を心の主人と仰いで生きる人はまことの念仏者であり、この場合、煩惱はあつてもそれは往生の妨げにはならないと法然聖人はおっしゃっているのです。

反対に煩惱を主人とし、念仏を客人として生きていく人は、煩惱や我欲を達成する手段として仏法を利用し、念仏を利用していきますから、結

局は迷いを深くするばかりです。それを法然聖人は「雑毒虚仮の善にて往生にはさらはるなり」といわれたのです。同じことを蓮如上人は『御一代記聞書』に、

一 仏法をあるじとし、世間を客人とせよといへり。仏法のうへよりは、世間のことは時にしたがひあひはたらくべきことなりと云々。

と言われています。阿弥陀さまは、私たち凡夫は臨終のその時まで煩惱から離れることのできないことをお見通しであり、そんな私たちのために南無阿弥陀仏のお名号、先手の救いを届けてくださいました。

南無の二字は「我にまかせよ」、阿弥陀仏は「必ず救う」とお聞かせいただき、お念仏を心のあるじとして仰いで生きる日暮しのご縁は、迷いの此岸から悟りの彼岸への念仏無礙の道を歩ませていただくものですよと教えていただいた暖冬一月、二月の二カ月でした。

法語の世界

《原文》

重宝の珍物を調へ経営をしてもてなせども、食せざればその詮なし。同行寄合ひ讚嘆すれども、信をとる人なければ、珍物を食せざるとおなじことなりと云々。

〔蓮如上人御一代記聞書〕二百三十

《現代語訳》

「珍しい食べ物を用意し、料理してもてなしても、客がそれを食わなければ無意味である。念仏の仲間が集まって、み教えについて語りあつても、信心を得る人がいなければ、せつかくのごちそうを食べないのと同じことである」と仰せになりました。

《用語の解説》

重宝の珍物：珍しい食べ物

経営………接待のために奔走する、ここでは料理すること。

春季彼岸会法要のお知らせ

とき 三月二十一日(木) 午前九時半
ところ 金光寺本堂
勤行 正信念仏偈(草譜)・六首引き
講師 未定
その他 経本・念珠・式章(門徒・仏婦会員)をご持参ください。

法要終了後、仏教婦人会総会を開催します。

金光寺からの連絡

初盆会について

初盆会について、日時を決め、お齋の予定をお立ての際は早目にご連絡ください。受付順に日時を決めます。本年は3月5日現在、21軒が初盆会をお迎えになりました。お齋の予定がない場合も連絡ください。当山の空いている時間にお参りをいたします。

